

## 東三の丸の景観について － 福井城下の視的考察 その13 －

伊豆蔵 庫 喜\*

### The Higashi Sannomaru in Fukui castle. － The sight of the Fukui castle town, Part 13 －

Kouki Izukura

This paper deals with the sight of the Higashi Sannomaru in Fukui castle at the late of Edo period. The Higashi Sannomaru was surrounded by the moats. The stone walls and earthen walls linked together around it. The Higashi Sannomaru was divided into three sections. The upper class of Samurai-residences was in the western section. The main gate called Kita Sannomaru-gomon was in the north section. The two-storied Kite-gomon was in the side of western section. The four porters always serviced in the Kite-gomon. The gate area of Kite-gomon was narrower than that of the area of Kurogane-gomon and Hato-gomon.

#### 1. はじめに

本研究は幕末頃の福井城下を描いた『福井城旧景』<sup>1)</sup>(以下、『旧景』とする)を用いて、当時の福井城やその城下の景観を視覚的に検討するものである。本稿は『旧景』に描かれている東三の丸の景観を報告するとともに、北三の丸御門と切手御門の門構えや規模について考察する。

すでに福井城の四重目の堀沿いに置かれていた桜御門と柳御門、三重目の堀沿いの鉄御門と清水御門、百間堀沿いの鳩ノ御門の規模や周辺の様子について報告した<sup>2)</sup>。それによれば各御門とも前方に1重の表門、後方に2重の櫓門からなる櫓形門で、門番が1人～2人常駐して警衛にあたっていた。そして、鉄御門や清水御門、鳩ノ御門付近の石垣上部には板葺き、白漆喰壁の土塀が建ち、福井城の中心部に近い様子が窺える。

#### 2. 東三の丸について

##### (1)位置

近世における福井城は本丸を中心として二の丸、三の丸、その外側に外郭を配した環郭式城郭であった。図－1は幕末の文政2年(1819)に写された『福井城図』<sup>3)</sup>を書き起こしたものである。

本丸は南側を正面として瓦御門を構えている。中央部に本丸御殿、西北隅に天守台があり、北東(艮)・東南(巽)・西南(坤)の三隅に櫓が建っている

---

\* 建設工学科 建築学専攻

本丸を囲む内堀を界して二の丸が取り巻いている。西二の丸は山里丸とも呼ばれ、武具蔵などがあった。南二の丸には馬屋や厩御殿、馬場がみられる。三の丸は二の丸の外側に設けられていた郭で、東南部を除く三方にあった。本稿で取扱う東三の丸は、本丸の東方にあり、3区画に分かれている。中央の一番大きな区画(イ)には永見家や山本家などの禄高300~500石の武家屋敷が並び、西端の東二の丸との境に切手御門がある。北側の一画(ロ)には「矢場」がみられ、その西側にもうひとつの区画(ハ)があり、北端に北三の丸御門がある。

ちなみに、旧東三の丸一帯は現在の大手1丁目と2丁目にあたり、福井公共職業安定所や福井営林署などが建つビジネス街である。旧外堀は埋められているが、内堀越しに本丸の石垣が望めて唯一旧城郭の景観を残す地区である。そして、新福井駅前の交差点付近は三の丸と呼ばれ、藩政時代の名称を今に伝えている。

## (2)『旧景』にみる東三の丸の様子

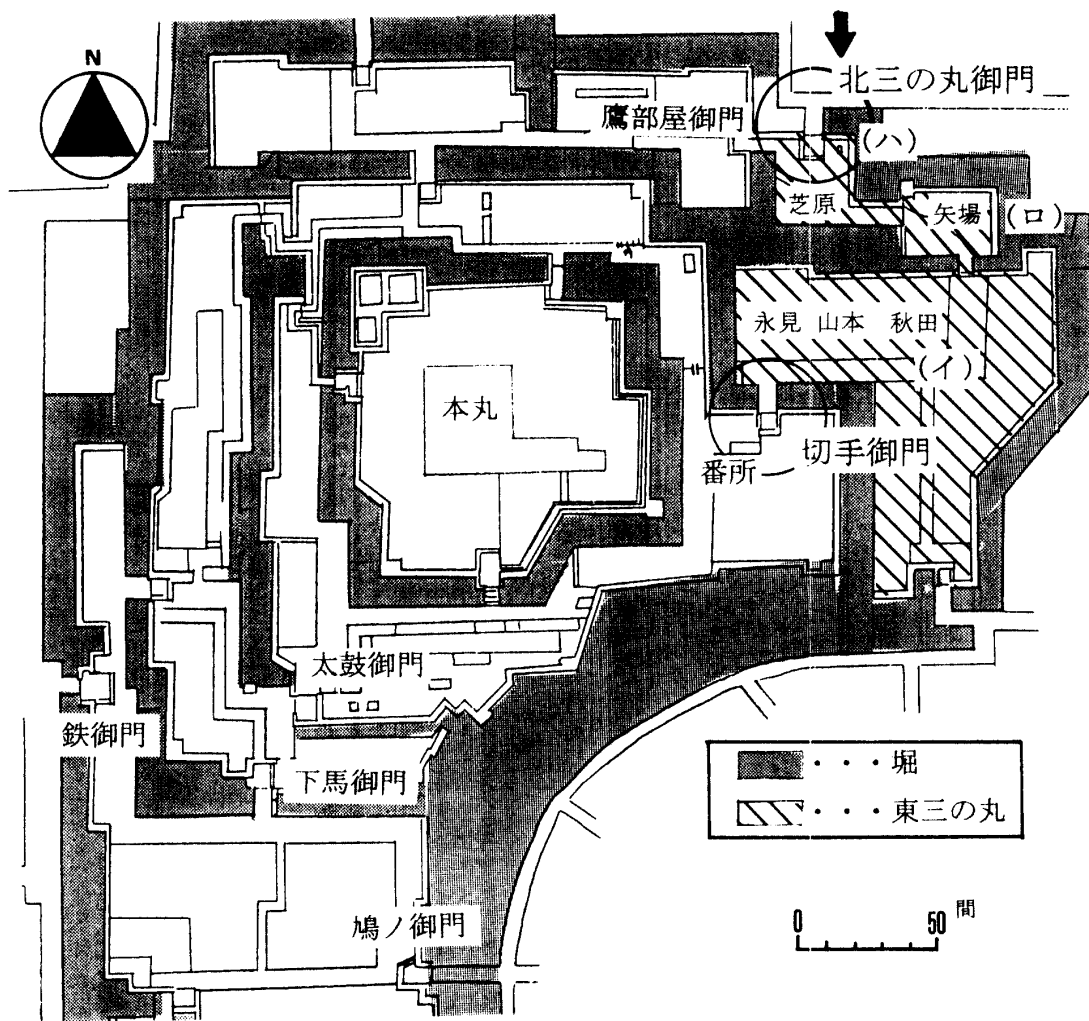
写真-1は『旧景』の中の絵図で、東三の丸周辺の堀や石垣の様子および門構えなどがわかる。正面の水堀は福井城の三重目の堀である。堀に架けられた土橋を渡った所にあるのが、北三の丸御門である。堀を挟んだ右手奥には、鷹部屋口御門がみられる。門を潜った所は、鷹匠の屋敷が置かれていたことから鷹匠町と呼ばれていた。

門の左側には矩形状の石垣がみられる。この石垣は、矢場がある区画の北側に張り出した部分で、そこから左手に延びる堀と石垣の状態は図-1と一致する。堀の淵沿いには武家屋敷の塀がみられる。

石垣の後方には土塀越しに松が植えられ、その奥に土瓦葺きと思われる灰色屋根<sup>4)</sup>の櫓門がみられる。この門は図-1において矢場から東三の丸へ入る門に相当するが、名称は記されていない。なお、「福井御城之覚」<sup>5)</sup>はこの門を井上半太夫前御門と記している<sup>6)</sup>。

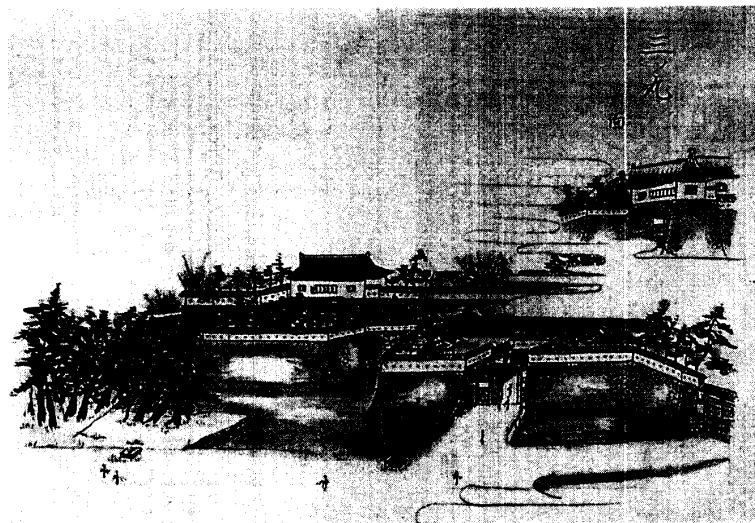
この櫓門の右手奥に、笏谷石の石瓦葺きとみられる青色屋根<sup>7)</sup>の2重櫓門が描かれている。この門は切手御門である。また、石垣上部には板葺きを示す茶色屋根<sup>8)</sup>の土塀があり、外壁は白漆喰壁で矢狭間や鉄砲狭間がみられる。このような土塀の形式は、すでに報告した鉄御門や鳩ノ御門付近と同じである。

ところで、この絵図は東三の丸が広範囲に描かれていて、石垣や土塀が連続して繋がっている様子がわかる。各区画の入り口には必ず門が設けられ、石垣を巧みに配置して通りを屈曲させ直線的に侵入できない状態が窺える。そして、石垣の上には松などの樹木が植えられ、堀の外側から城内を容易に見通すことができない。このように、東三の丸周辺は幾つか武家屋敷があるが、これまでみてきた武家地とは違った景観を読み取ることができる。



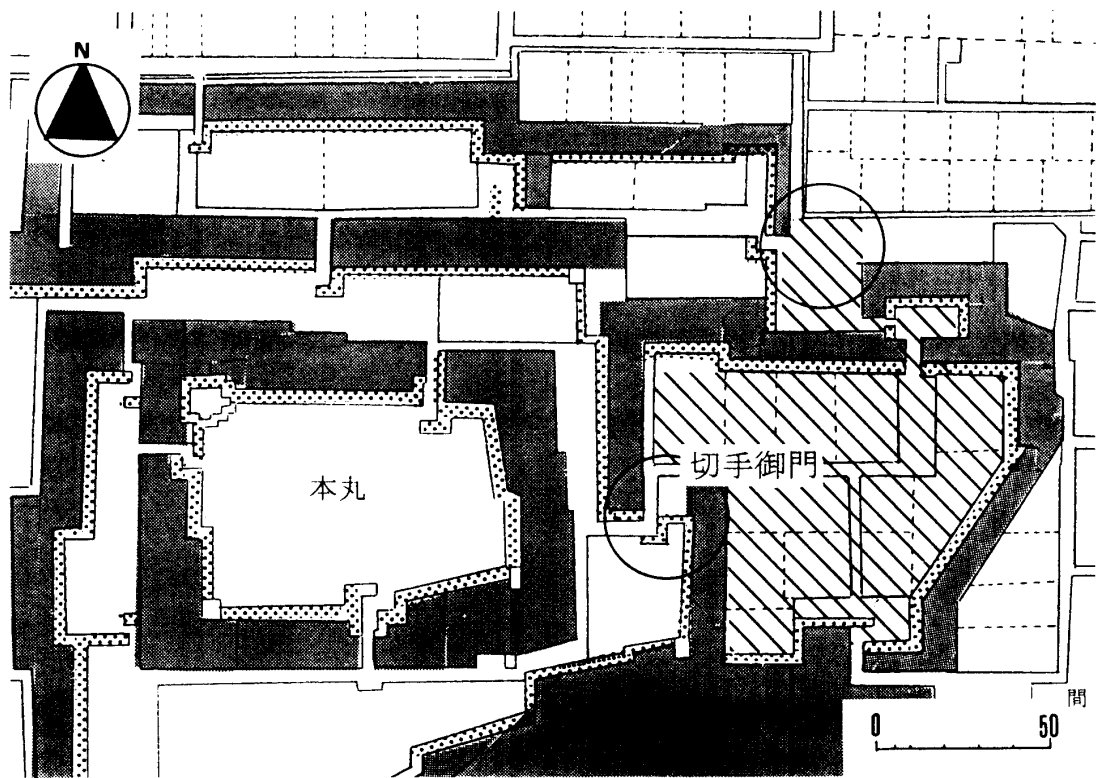
図－1 幕末頃の東三の丸（文政2年写『福井城図』より作成）

\* 図中の矢印は、下掲の写真－1の方向を示す

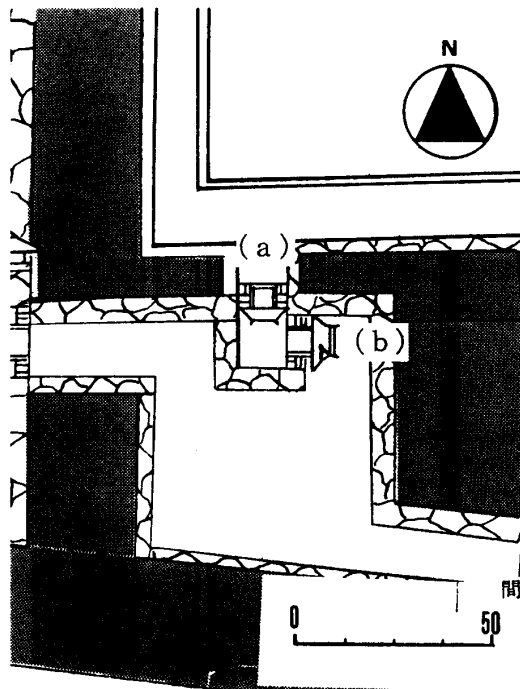


写真－1 東三の丸の様子

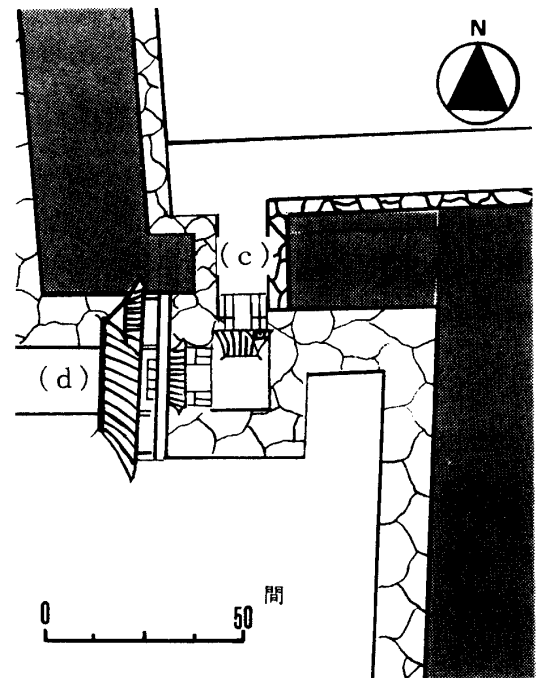
（『福井城旧景』より）



図－2 慶長18年頃の東三の丸（『北庄家中図』より作成）



図－3 北三の丸御門の状態



図－4 切手御門の状態

### 3. 北三の丸御門について

#### (1)概要

図－2は慶長18年(1613)頃の『北庄家中図』<sup>9)</sup>をもとに、東三の丸付近を書き起こしたものである。図－1を対比すると、東三の丸の位置や形状はほぼ同じであるが、図－1にみられる北三の丸御門の北側にある堀と土橋は図－2にはなく、慶長期には北三の丸御門はまだなかったと考えられる。しかし、万治2年(1659)の『福井御城下絵図』<sup>10)</sup>にはこの位置に枡形がみられる。この城下図には、すでに報告した鉄御門や桜御門なども枡形だけが記されているから、慶長19年以降～万治2年までの間に北三の丸御門が造られたと考えられる。その後、寛文9年の大火で焼失したが、まもなく再建されたようで、その後の正徳4年(1714)や文化3年(1806)の城下図でも同じ位置に北三の丸御門の枡形を確認することができる。

『佐野文書』<sup>11)</sup>には「三の丸北口御門 番御先筒一人」とあり、北三の丸御門には番人が1人詰めていたことがわかる。

#### (2)門構え

北三の丸御門は2つの門からなる枡形門である。手前の門は3間1戸の平屋の門で、中央に両開きの扉が建ち、両脇に袖壁が付いている。屋根は茶色に塗られているから板葺きと思われる。この形式は桜御門などと同じである。

奥の門も表門と同様、板葺きの平屋門である。扉などの詳細は確認できないが、ほぼ表門と同じ造りと思われる。これまでみてきた城門の多くは、表門は平屋で、後方は2重の櫓門からなっている。したがって、北三の丸御門の構成はこれらと異なり、むしろ町口に置かれていた中島門に近いものである。

#### (3)規模

図－3は正徳4年(1714)『福井御城下絵図』<sup>12)</sup>をもとに、北三の丸御門の大きさや構成を示したものである。手前の門(a)は八軒町通りから7間ほど土橋を入った位置にある。門の幅は5間で、北向きに門扉を開いている。

奥の門(b)は表門の東側に矩手にある西向きの門で、幅は4間である。中央に入り口とその両脇に袖壁がある。

このように、L字形に建つ2つの門の幅が5間と4間であるから、北三の丸御門の枡形の広さは約20坪になる。これまでみてきた三重目や四重目の堀沿いに設けられていた城門の中で、最も枡形が小さいのが柳御門の約45坪である。それよりも、北三の丸御門の枡形は小さかった。

### 4. 切手御門について

#### (1)概要

切手御門は北三の丸御門の南西にある。先掲の『北庄家中図』および慶長19年(1614)『北庄古

図』<sup>13)</sup>で同じ位置に枳形が確認できるから、切手御門は前述した北三の丸御門と異なり、慶長年間の秀康による城下建設時にすでに造られたと考えられる。その後、正保期(1644~47)や万治2年(1659)の城下図にも同じ位置にみられ、寛文9年(1669)4月の大火で焼失したが、翌10年~12年にかけて再建されている<sup>14)</sup>。そして、正徳4年(1714)や文化3年(1806)の城下図にも確認できるから、切手御門は寛文の再建以後、幕末まで東三の丸の西隅に存続していたことがわかる。

『福井御城之覚』に「切手御門 二階は明き、武頭組召連番」とあり、切手御門が2階建てであること、そして二階は矢竹や火縄を納める物置としては使用されてなかったことがわかる<sup>15)</sup>。

『佐野文書』に「切手御門 番士御留主物頭 上足軽二人下同二人」とあることから、門番は御留守物頭組の足軽が上階と下階にそれぞれ2人ずつ、計4人が詰めていたことになる。すでに報告した三重目の堀沿いの鉄御門や百間堀の内沿いの鳩ノ御門は門番が2人であり、切手御門はこれらの門より嚴重な取り締まりであったことが窺える。

## (2)位置

切手御門は図-1に示すように東三の丸の西隅、二の丸と三の丸を分ける二重目の堀沿いにみられ、城内にあった武家屋敷と城郭との境にあたる。

門を入った所に「留守者頭 番所」とあり、番所が設けられていたことがわかる。このような番所は、鉄御門や清水御門、鳩ノ御門にはみられなかった。さらに、西に進むと、中仕切御門を経て、本丸の正面に架かる御本城橋に至る。したがって、切手御門は東方からの登城ルートにあたり、東二の丸への入り口門として福井城の重要な城門のひとつであった。

## (3)門構え

切手御門は手前に平屋の表門とその右手奥の2階建ての櫓門からなる枳形門である。この形式は、すでに述べた鉄御門などと同じである。

表門は中央に両開きの扉、その両脇に袖壁が付く。屋根は青色で示されているから、笏谷石の石瓦葺きと思われる。

櫓門も表門と同様に、石瓦葺きと判断できるが、入り口付近の詳しい様子はわからない。

## (4)規模

図-4は切手御門の大きさや構成を示したものである<sup>16)</sup>。表門(c)は道いっぱいに建ち、門扉は北向きである。入り口は中央部にあり、両脇は袖壁である。道幅が5間であるから、表門は入り口の幅が3間、両脇の袖壁が1間ずつと考えられる。

表門の西側奥の櫓門(d)は2階建てで、東向きに門扉を開いている。1階中央に3間前後の入り口、両脇に袖壁があり、両端は石垣が積まれている。石垣を除く1階部分の幅は5間である。

表門の幅が5間、櫓門の1階部分の幅が5間と考えられるから、枳形の広さは約25坪になり、北三の丸御門の約20坪と比べて5坪ほど広い。しかし、同じ形式をもつ福井城の西側の鉄御門が

約 180 坪、東南側の鳩ノ御門が約 50 坪であったから、これらの門と比べると切手御門は小規模であった。

## 5. おわりに

以上、東三の丸の景観について検討した。その結果、東三の丸は周囲を堀が囲み、石垣と土塀が屈曲して続いていた様子がわかる。郭内は 3 区画に分かれており、中央の区画は祿高 300～500 石の武家屋敷が配され、北の出入り口に北三の丸御門と東二の丸との連絡口に切手御門が設けられていた。特に東二の丸境の切手御門は、常時 4 人の門番が詰めていて、三重目の堀沿いにあった鉄御門や百間堀の内沿いに置かれていた鳩ノ御門よりも厳重な城門であったことがわかる。しかし、枳形の広さは小さめであった。これは切手御門と北三の丸御門が、福井城の裏手に設けられていたためと考えられる。

### 〔註〕

- 1) 松平宗紀氏所蔵 『松平文庫』 福井県立図書館保管
- 2) 拙稿「桜御門と柳御門について」福井工業大学研究紀要 第 28 号 1998 年、伊豆蔵庫喜・吉田純一「鉄御門と清水御門について」日本建築学会北陸支部研究報告集 第 41 号 1998 年、伊豆蔵庫喜・吉田純一「鳩ノ御門について」日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2 1998 年 で報告している。
- 3) 松平宗紀氏所蔵 『松平文庫』 福井県立図書館保管 『福井城図』文政 2 年写
- 4) 拙稿「『福井城旧景』にみられる屋根表現」北陸都市史学会 1998 年 で報告している。
- 5) 「福井御城之覚」(鈴木準道・舟沢茂樹校訂『福井藩土事典』福井市役所 歴史図書社 1980 年 p22 所収)
- 6) 正徳 4 年(1714)の『福井御城下絵図』では、櫓門の東側に井上半太夫屋敷がみられる。しかし、幕末にはここに御座所が置かれていて、井上半太夫前御門とは正式な名称ではないと思われる。
- 7) 註 4 に掲げた「『福井城旧景』にみられる屋根表現」参照
- 8) 註 7 と同じ
- 9) 松平宗紀氏所蔵 『松平文庫』 福井県立図書館保管 『北庄家中図』慶長 18 年頃
- 10) 松平宗紀氏所蔵 『松平文庫』 福井県立図書館保管 『福井御城下絵図』万治 2 年
- 11) 『稿本福井市史(上)』福井市役所 歴史図書社 1973 年 p166 所収
- 12) 松平宗紀氏所蔵 『松平文庫』 福井県立図書館保管 『福井御城下絵図』正徳 4 年
- 13) 福井公民館所蔵 松原信之『若越城下町古図集』古今書院 1957 年 掲載
- 14) 『稿本福井市史(上)』福井市役所 歴史図書社 1973 年 p163
- 15) 瓦御門の二階は矢竹が置かれ、北不明御門の二階は火縄などの物品が置かれていた。
- 16) 図-3 と同じ、正徳 4 年(1714)の『福井御城下絵図』をもとに書き起こしたものである。

(平成10年12月 1 日受理)